気象を源泉とする能登の気色
ー 観天望気に着目して ー

神山藍[1]

[1]正会員　東洋大学（〒3500-8585 埼玉県川越市鯨井2100，E-mail:kamiyama@toyo.jp）

本研究は，気象を源泉とする風景を探ることを目的とし，珠洲市蛸島町に伝わる神事芸能「早船狂言」から，船乗りの日和見に関する主要な判断要素を抽出し，続く章において，抽出された判断要素の固有の名の由来と観天望気との関わりを明らかにした．最後に，明らかとなった気象に関わる気色とその後に同名で語られる風景について考察すると，同様の現象を捉えつつも，両者には大きな感覚の質の違いがある．漁師，船乗りの気色は，自然の法則を強く自覚した実相であり，人間の実生活に密接するのに対し，風景は，実用的目的から解放された実相であり，美的感覚に基づいた自然美の賞賛あるいは美しいと感じる心であると言える．

キーワード: 気象，観天望気，気色，日和見，漁師，船乗り，能登

１．はじめに

⑴ 研究の背景と目的

日本人が，気象に対して，極めて敏感な感覚を持ち，その姿をこれまで詩歌や絵画に残し，多彩な気象を浮世絵に表現し，日本の風景として芸術の分野にまで昇華させてきたのは，日本固有の風土との密接性にあると言えるだろう．そして，「土地の気候，気象，地質，地味，地形，景観などの総称[1)]」とする和辻の「風土」や「風景」という言葉に使用される「風」の文字は，風水，風光，風致，風物，風情，風趣，風流，風雅，風格，風俗，風習など，実に多くの自然，見かけの様子，習わしや様式を表す意味として使用されることから，日本の風景が何らかの形で，風に影響することに疑いの余地はないだろうが，そのつながりは，現代において自覚の機会を持たないことが多い．

日本各地で，風の名が多く残ることも，また事実であり，そのほとんどが，海に連関し，海ではそれぞれの風の性質が，風の名となっている[2)]．かつては，浜ことば，漁師ことばあるいは，漁師や船乗りが日常用語として使用された風の名は，もはや忘れ去られようとしている．急速に失われる江戸文化を嘆いた考証家，幸田露伴（1867-1947）が書き記した『水上語彙[3)]』のように，記録された言葉もあったが，活きた言葉としては保持が困難であった．

風の移り変わりが常であると同様に，風景もまた，はかなく，移ろう．古い風景が新しい風景に取って代わることは，進化の過程において仕方のないことではあるが，風景学としては，その過程を等閑して，疎かにすることはできない．あるいは，『論語』にある「告朔の礼[4)]」のように礼を残せば，現代社会において風景の復活に役立てることもできよう．

そこで，本研究は，気象を源泉とする風景を探り，その成り立ちを明らかにすることを目的とする．

⑵ 研究の方法

本研究では，珠洲市の古典芸能「早船狂言台紙」に着目し，気象を源泉とする船乗りの日和見を探り，その判断要素を抽出する．

次に，船乗りの日和見において抽出された判断要素を中心に，固有の名とその由来と観望天気を気象辞典，天気俚諺，観天望気，郷土資料，方言，民謡，諺などにより能登特有の気色を把握する．

最後に気象を源泉とする気色と同名で語られる風景との関わりについて考証する．風景については，詩歌，絵図，地誌，紀行文などを参考する．

⑶ 研究の対象地

能登半島は，古くから漁業が盛んな地域であり，古くは組織的な漁法による捕鯨やいるか漁などの採漁方法が発達し，江戸期には北前船の寄港地として盛栄を極めた．このため，能登には，海に関する地名が数多く残る．例えば，「波」「ハセ」「浦」の付く地名や，「崎，岬，鼻」などの自然地名が海沿いの地域に多く残る．僅かで

はあるが，羽咋郡志賀町には西海風無地区と西海風戸地区のような珍しい地名も残る．

一方，気象に関しては，「能登の二十四風[5]」という言葉が残る様に，実に多くの風の名が自然を注意深く観察した結果として残っている（**図-1**）．

また，日和待ちの船乗りが日和見をするために利用した日和山[6]が，小木港，高屋港，福浦港，白尾に残る[7]など，古い文化の形跡が色濃く残る．以上から，本研究は，漁業，海運の盛んな能登半島を中心に，気象を源泉とする気色を探る．

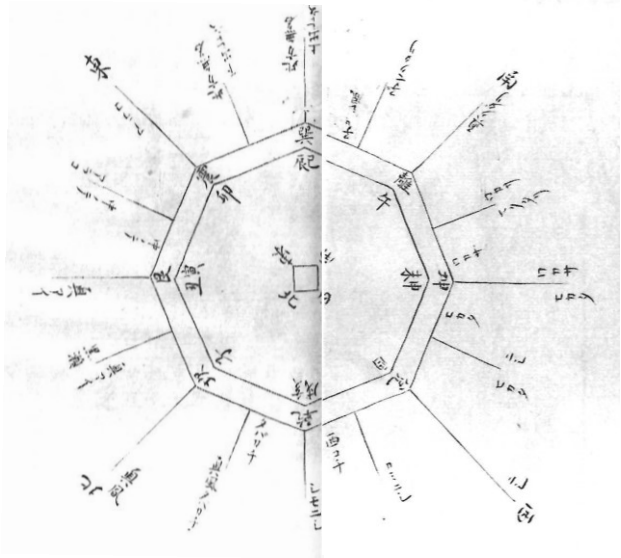

図-1　風向きの図『能登国採魚図絵[9]』より
江戸時代後期（天保９年）

２．船乗りの日和見

日本各地で多くの風の名が残るのは，海に依存する生活の名残である．農民も決して風に無関心ではないが，その多くは海の生活からの感化を受けている[9]．とりわけ，「板子一枚下は地獄」と言われる様に，航海は，常に危険に晒され，命がけであった．従って，風の名の多くは，漁師や船乗りが自身の魂を風に委ね，風の性質を全身全霊で感受し，言い分けることが生存を手にする術であった．このような船乗りの日和見を克明に描写する古典芸能が能登半島の先端に位置する珠洲市に残る．

(1) 蛸島早船狂言

珠洲市蛸島町では，高倉彦神社の秋祭りに「早船狂言」と呼ばれる神事芸能が行われる．その一端に，船頭とトモトリ（艫取）の海路日和についての問答があり，ここでは，天候を見定める観天望気の極意が示される．以下では，「早船狂言台詞[10]」（**図-2**）より，いくつかの興味深い気象上の判断要素について述べる．

a) 東風の気色

まず，狂言中のトモトリの応答には，「東風気色」「東風の受」「東風の待」のように必ずと言ってよい程「東風」が付く（**図-2**）．「東風」の風は，海路日和を判断する上で最重要視された要素であることがわかる．

同時に，「東風気色」の「気色」に着目すると，新潟県佐渡および頸城郡，石川県石川郡，熊本県玉名郡などでは，「気色」を「空模様」と捉える方言があり[11]，佐渡では，「けしきが悪い，雨がふるぞ[12]」と言い，江戸期に執筆された『能登日記』には，「外浜に出れば日和山・獄山見ゆる．舟人のけしきを見る所なり．[13]」と記される．狂言台詞にも「ウンドン気色にチャワン空，ニンニクの皮，むいた様な気色」と表現される（**図-2**）．ここでの気色は，すなわち空模様であり，「東風気色」は東風の空模様を示していると言える．そこで，以下では，気象に関わる風景を「気色」として言い分ける．

早船狂言台詞

入歌：	土手の提灯吉原がよい
船頭：	はてはて良ェ天気，ウンドン気色にチャワン空，ニンニクの皮，むいた様な気色，トモトリを呼び出して，だんこう致そう．
トモ：	ぱっと良い天気，ウンドン気色にチャワン空，ニンニクむいた様な気色，これ船頭殿，何の御用でござります．
船頭：	その方呼び出したのは別儀ではない．手前は，永々日和待ちを致し，今になった天気よさそうに依って，出船致そうと思う．その方何と思う．
トモ：	それよう御座りましよう．風，東風でございます．
船頭：	夕べ日の入りの気色，何と見た．
トモ：	夕べ日の入りの気色なあ，東風気色と見うけました．
船頭：	夕べ乾光った．何と見た．
トモ：	夕べ乾光ったなあ，あれもやはり東風の受，光と見うけました．
船頭：	夕べあの山に黄竜の立った，何と見た．
トモ：	夕べあの山に黄竜の立ったなあ，秋春は受けにたち，夏は風根に立つと申して，あれもやはり東風の待，雲と見うけました．
船頭：	夕べの月の前の雲，チリ，チリ，チリと下った雲下ったに依って，どうとも手前は呑みこまん．
トモ：	これ船頭殿，雲下って七日の東風吹く，雲に空言あれど，成空事なし，雲に空事なうては，かないません．
船頭：	いやいやどうとも手前は呑こまん．
トモ：	これ船頭殿，身は高倉彦の神社のトモ取，梶を枕に，梶柄をなぐさむついに気色を見損じは致さぬ．お前が只，揚屋掛に日を暮し，高尾高崎にどんと打込み百六十日が間，船の底に虫のつく事も知らぬか，やさまだか．
船頭：	ならば，トモ取任せにしてやろう．若い者共にトマとらせ．
トモ：	はあ一畏りました．えーさ若衆とまらっしゃい．

図-2　早船狂言台詞

b) 星の方位・輝き

早船狂言台詞中の「夕べ乾光った」の光については，月，星，雷，夕焼けなど様々に推測できるが，乾（北

西）という方角を示すこと，加えて，高知県や山口県に残る狂言調の問答では，天気日柄を月や星から判断する事例があることから，星の輝きを示す表現であろうと推測する．

高知県室戸崎町で元旦に行われる鯨のイサバ船の乗り初めの式や山口県大島郡周防大島町の船の挨拶儀礼[14]の問答では，月や星の落ち着き具合から，日和を見定めている（**図-3**）．「すまろう」とは，昴（すまる，すばる）の訛りであるという[15]．能登鹿島郡の臼摺歌には「しばりや西へ行く　月山ばなへ　にはに白籾や小山ほど[16]」という民謡の一節があり，「しばり」は星の昴を示すという[17]．このように特定の星の方位，輝き具合が天候を見定める要素であったことが考えられる．

コマオトコ：「艫に申しようござんすか」
オヤヂ：　「良うござんす」
コマ：　「今日は天気日柄も良し，月すまろうのすわりも良し，向ふに見えるは宝の島，宝の島へ宝を積みにまはろうてはござらぬか」
オヤヂ：　「それようござんしよう」
コマ：　「さらば之より錨にとり掛りませう」
（掛声）：「ヤンザエー」
コマオトコ：「とほりがぢ」
（中乗り）　「とほりがぢ」「ヤンザエー」
コマオトコ：「おもうかぢ」
（中乗り）：「おもうかぢ」
（コマオトコ）：「ヤンザエー，ヨウロソ」
（中乗り）：「ヨウロソ」

図-3　イサバ船の乗り初めの式『土佐漁村民俗雑記[18]』より

c）雲の色彩・姿形・高低・陰影

早船狂言台詞中の雲に関して「黄竜の立ったなあ，秋春は受けにたち，夏は風根に立つ」（**図-2**）という表現がある．まず，「黄竜」の黄色に関しては，黄雲を「金色に染まった吉祥を告げる雲[19]」とする故事や伊予の水軍記には，「黄雲變而黒陰晦之亦變（ルハ）白日照之[20]」とあり，雲の色彩により日和を見定める方法があると言える．

「黄竜」の竜に関しては，竜は雲と共に現れ，虎は風を引き連れて現れる意の「雲竜風虎[21]」という諺があるように，竜の姿に似た雲という意味であろう．また，「立つ」という言葉が示すように上昇する雲を指すと言える．

次に，続く問答には「秋春は受けにたち，夏は風根に立つ」（**図-2**）という応答がある．石垣市八重山では「風根（カザニ）が表れるのは台風の兆し[22]」という天気俚諺がある．「風根」は気象用語で「御光（後光）」とされ，雄大積雲や積乱雲の影であるという[23]．日没直後に見られる現象であり，雲の背後の太陽からの光が雲の隙間から見える空模様を指す．毛利水軍資料『船武者積並天文』には，「日之入黄光リナレハ明日風起[24]」とあり，沖縄の「風根」と共通の性質が示される．このように，雲の色彩，姿形，高低，陰影によって気象を正確に判断する日和見が示されている．

⑵ 日和の判断要素

以上のように，「早船狂言」を読み解くと，途方もない時間と労力を費やし，先人が注意深く観察した結果として風，星，雲などの日和見する上での重要な判断要素が抽出される．海運訓を儀式として後世に残そうとする動機から，おそらくこれらは地域の気象を判断する上での核心的要素には間違いないだろうが，能登にはこれに相当する気象判断要素がほかにもありそうである．そこで，以下では，「早船狂言」に基づき抽出された風，星，雲に着目し，漁師，船乗りの気色を探求しつつ，断片的ではあるが他の地域や類似する事象を参考に気象を源泉とする能登の気色を考証する

３．風の風向・季節・周期・性質・強弱・寒暖

⑴ あいの風

能登半島で使用される風については，『風の事典[25]』から風の名を調べただけでも，約50種の風の名があり，これを風向別に数えると100種以上ある（**表-1**）．この中には，絶えて久しい名も多いが，今日まで生き残る風の名もある．とりわけ「早船狂言」の中で登場する「東風」は，能登の海民にとって特別であった．一般的には，「東風」は「こち」と読み，東の風を意味するが，日本海側では，「東風」を「アイ」「アユ」と読み，夏，主として日本海の沿岸部で吹く，穏やかな海風の局地名[26]を指す風の名であった．

東風という名のとおり，風向に着目すると，あいの風は，必ずしも東からの風を示す風でなないことがわかる（**表-１**）．また，「アイ」の付く風は，11種もあることから，風位のみに即した名前でないと言える．更に，**表-1**の風の性質1)，2)，11)や鹿島郡中島町鈍打地方盆踊唄「雪がちらちらあいの風[27]」とあるように，一定の季節を示す風でもない．つまり，風位や季節というより，ほかの性質があると言える．

東風を「あいのかぜ」と読む高志の方言は，奥能登の重要無形民俗文化財として残る「あえのこと」と呼ばれる儀礼，富山県の方で能登から吹く風を「能登アイ」と呼ぶ慣習，富山湾の藍色の海色を「あいがめ」と呼ぶ深海の地形，干魚など塩で処理した海産物の総称である四十物を「あいもの」と呼ぶ食料などに何らかの深い関係があろうことが容易に考えられ，海からの恩恵にまつわる種の呼び名であろうことが推測できる．柳田國男は，

表-1　能登半島の風の名　『風の事典[28]』より

風名	風向	使用地域	風の性質
アイ	北風	鳳至郡門前鹿磯→1 羽咋郡富来町領家町 羽咋郡富来町福浦港	1) 5-6 月のさわやかな風 「アイの朝なぎ，クダリの夕なぎ」 2) 8-10 月に吹けば雨はない風，キタコチとも言う 3)秋に強く吹く風，長続きがし，波は平均的 4)強い風で三日も続く 5)「夏のアイと人夫は日いっぱい」 6)アイタバカチとも言う 7)「アイの強吹きやのち雨」 8)「アイの朝なぎ，クダリの夕なぎ」漁によい 9)主としてなぎの風，秋に多く寒い，危険度は少ない．好漁 10)波なくおだやかな風 11)年中吹くが，3—4 月に卓越する寒い風．海上は夜おだやかになる 12)海から陸地へ向かう風，鮎は釣れない，雨はめったに降らない 13)「アイの朝なぎ，クダリの夕なぎ」 14)「アイの朝なぎ，クダリの夕なぎ」，ヤマセドラアイとも言う 15)寒中の強く寒い風，三日間も吹けば魚が死ぬ．空きのアイノカゼは吹きはじめは弱いが，一日一日強くなり，一週間も続く<秋アイ>は夜の風 16)海難を生ずる風 17)日暮れになり弱いアラシが吹くと翌日はなぎになる，日中でも強い場合はしけの前触れになる，漁は少ない 18)荒れ風で多く，危険度大，風より波が先にくる，暖かい風 19)台風の前兆の風 20)春に多い風 21)マクダリとも言う 22)この風が吹くと澗口には波浪がたつので，入港しにくい，沖合の操業には要注意，体調が悪くなる 23)荒天の時には，クダリが強く，次第に西，北西に回りやむ，台風時も同じ 24)「アイの前なぎ，クダリの夜なぎ」 25)春先に多い風，危険度八割，漁出来ず 26)秋の強風，3-5 日吹けば雨なし 27)春先きから吹く風，底曳網によし 「アイの朝なぎ，クダリの夜なぎ」 28)3-4 月に多く暖かくなる風，4-7 月には「アイの朝なぎ，クダリの夜なぎ」皆月祭（8 月 7-8 日）はクダリが多い 29)風波が高くなる前に吹く風で，危険，休漁 30)周年の風，冬は特に強く暖かい風，北上海遊魚が岸へよる．海上は朝おだやか，シカタともいう 31)陸地から海に向かって吹く風，鮎がよく釣れる．大火になったときの風はほとんどこれ 32)危険な風，風害あり，要注意の風 33)「アイの朝なぎ，クダリの夜なぎ」シカタとも言う 34)春に多い風 35)春の強い風，フェーン現象を伴う，沖合ほど波が高い 36)朝 8 時より吹き出しだんだん強くなり 16 時ごと弱くなる風の風，春～夏に多く，昼の風で夜はやむ 37)初春や初冬の変り目に多い風，昼間の風，突風になることもあり危険，低気圧，寒冷前線の日本海通過時に吹く 38)冬に多い風 39)夏～秋に多い 40)沖合ほど波が高い，シカタについ荒れる，夏の平穏な時の夜に吹く風も言う 41)冬の風 42)秋～冬に多い 43)冬に多く吹く風 44)夕方に一時吹く風 45)富山湾より大波が押し寄せる風で，海難が多い．能登内浦では一番高波が立つ 46)冬に多い風 47)冬の北風は頭痛の風，大波になるおそれもある 48)マカゼとも言う 49)9 月に時どき吹く季節風の吹き出し．11—3 月には多く吹く 50)冬に吹き約 3 日続く，昼間はなぐ 51)冬に多い 52)冬の強い風
アイカゼ	東風	鳳至郡穴水町甲	
アイタバカツ	北東風	鳳至郡穴水町沖波 珠洲市狼煙町→6	
アイニシクダリ	南東風	鳳至郡能都町宇出津	
アイノカゼ	北風	石川郡美川町永代町→7	
	北東風	輪島市鳳至町→8 羽咋郡富来町赤崎→9 羽咋市滝町→10	
	北東～東風	珠洲市高屋町→11 輪島市河井町→12	
	東風	鳳至郡穴水町津波 鳳至郡穴水町前波→13 珠洲郡内浦町小木→14 珠洲市狼煙町→15	
	北西～北風	羽咋郡富来町風無→16	
アイヤスモン	東風	輪島市鳳至町	
アラシ	東風	鳳至郡門前町→17	
カミアラシ	南東風	鳳至郡門前町 羽咋郡志賀町高浜	
	南西風	羽咋郡富来町赤崎→18	
カミダシ	南東風	羽咋市滝町 羽咋市一宮村→19	
キタコチ	北東風	珠洲郡内浦町松波	
クダリ	南東風	珠洲市三崎町寺家	
	南風	鳳至郡穴水町川島→20 珠洲市宝立町 珠洲市狼煙町→21 羽咋市富来町風無→22 羽咋市富来町領家→23 羽咋市富来町福浦港 鹿島郡能登島町	
	南西風	鳳至郡穴水町前波→24 鳳至郡能都町宇出津→25 珠洲郡内浦町松波→26 輪島市鳳至町→27 鳳至郡門前町鹿磯→28 羽咋郡志賀町高浜→29	
	西風	鳳至郡穴水町甲 珠洲市高屋町→30	
	南～南西風	輪島市河井町→31	
	南西風	羽咋市滝町→32	
	西風	珠洲郡内浦町小木→33	
コチカゼ	東風	珠洲郡内浦町松波→34	
シカタ	南西風	珠洲市宝立→35	
	南西～西風	鳳至郡穴水町甲	
	西風	珠洲市高屋町 珠洲郡内浦町小木 珠洲郡三崎町寺家	
	北西風	珠洲市狼煙→36 鳳至郡穴水町前波→37	
シモカゼ	北風	珠洲郡内浦町松波→38	
	北東風	鳳至郡穴水町川島→39	
タカアイ	北風	石川県羽咋市滝町	
	北東風	羽咋郡志賀町高浜 鳳至郡穴水町前波 珠洲郡内浦町小木	
タカカゼ	西風	鳳至郡穴水町沖波 珠洲市宝立→40 羽咋郡富来町風無	
	北西風	輪島市鳳至→41	
タカクダリ	南西風	珠洲郡内浦小木→42	
	西風	輪島市鳳至町→43	
	北西風	珠洲市高屋	
タテヤマオロシ	南東風	珠洲市狼煙→44	
	南東～南風	鳳至郡穴水町甲→45	
タバカゼ	北風	輪島市鳳至町 鳳至郡穴水町甲 珠洲郡内浦町小木	
	北西風	羽咋郡志賀町高浜	
	北西～北風	鳳至郡穴水町川島→46	
タバカチ	北風	珠洲市狼煙→47 羽咋郡富来町赤崎→48	
	北北東風	鳳至郡穴水町前波	
	西風	鳳至郡門前町鹿磯→49	
	北西風	七尾市反崎→50 珠洲郡内浦松波→51 珠洲郡宝立町→52 珠洲市三崎町寺家	

風名	風向	使用地域	風の性質
タバカツ	北風	鳳至郡穴水町沖波	53)夏の朝，4—9 時に多い風，間断あり，漁不適 54)この風が強く吹いたあとは雨になる 55)地風とも言う 56)沖合の風波大 57)波なくおだやかな風 58)アイノカゼ・ヤマセとも呼ぶ 59)秋に多い風 60)秋に多い風 61)冬に吹く風 62)秋に多く吹く 63)春のフェン現象のときの風 64)春の風で 3-5 月上旬に吹き，イサザ・アユの遡上さかん．頭痛風，特にリュウマチの人には悪い風 65)「マアイのどうどうどん」沖へ行くほど波が高くなり，船べりを打つ 66)シモカゼとも言う 67)夏に多く，海上では涼しく感じる風 68)冬の風で特に強い．波は海岸・沖合とも中くらい 69)夜の風 70)「マカゼのドウドウドン」沖へ行くほど波が高くなり，船べりを打つ 71)主として秋の風，危険で 10 月ごろから吹く，日暮れまでになぐ 72)冬の風 73)春の風コチカゼとも言う 74)春～夏の風 75)夏のなぎ日の昼の風，夜はタカカゼという 76)秋の風で，2—3 日吹く．春は漁も多いが，危険も大 77)温暖前線接近による風で，強風は少ないが，大波が立つ 78)春の弱い風 79)「ヤスクダリどこ行く，しけ迎え」 80)このあと南→南西→西となりしけてくる．その後は北西→西へ回りなぎとなる 81)春と秋の風 82)「若狭どこ行くクダリノカゼ＝西風風迎えに，おまえ一人か，雨と二人連れ」 83)ヤスクダリとも言う 84)南から来て，東へ回る風 85)10-11 月の風でしけを呼ぶ．若狭湾から吹き出す風で若狭クダリとも言う 86)3-5 月の風 87)秋に多く吹く風 88)急にワカサが吹くと海難事故が起こり，漂流することあり危険 89)秋に多い強風，漁不適 90)しけを呼ぶ秋の強い風
ダシ	北東風	鳳至郡門前町四ケ浦→53	
	東風	七尾市反崎 羽咋市富来町 羽咋市志賀町高浜→54 羽咋市一宮町→55	
	南東風	輪島市鳳至町	
	南南東風	輪島市鳳至町	
	南南西風	珠洲市西海	
ダシカゼ	北風	羽咋郡志賀町高浜→56	
	南風	鳳至郡穴水町甲	
ダシノカゼ	北東～東風	羽咋郡富来町風無	
	東風	羽咋郡富来町領家	
	南風	羽咋郡富来町赤崎	
ヂカゼ	東風	羽咋郡滝町→57	
ドラアイ	東風	珠洲郡内浦町小木→58	
ニシ	西風	珠洲郡内海松波→59 珠洲市狼煙町	
ニシシカタ	西北西風	鳳至郡穴水町前波	
	北西風	鳳至郡能都町宇出津→60	
ニシタバカゼ	西風	羽咋郡志賀町高浜	
ニシタバカチ	西北西風	珠洲市三崎町寺家→61	
ニシタバカツ	北西風	鳳至郡穴水町沖波	
ニシタバカリ	西風	羽咋郡富来町領家	
ニシノカゼ	西風	七尾市石崎 鳳至郡穴水町前波 鳳至郡能都町宇出津→62	
ボウボウカゼ	南風	鳳至郡穴水町川島→63	
ボンボロカゼ	南風	輪島市河合町→64	
マアイ	北東風	鳳至郡穴水町甲 羽咋郡志賀町高浜→65	
マアイカゼ	北風	羽咋市滝町→66	
マカカゼ	北東風	七尾市石崎	
	西風	羽咋郡志賀町高浜→67	
マカゼ	北風	珠洲市宝立町→68 羽咋郡富来町赤崎→79 羽咋郡志賀町高浜→70	
	北西風	羽咋市滝町→71	
	北西～北風	鳳至郡穴水町川島→72	
マクダリ	南風	珠洲市三崎町寺家	
	南西風	羽咋市富来町風無	
マグロカゼ	東風	鳳至郡穴水町前波	
ヤスアイ	北東風	鳳至郡門前町鹿磯	
	東風	珠洲市内浦町松波→73 珠洲市三崎町寺家 羽咋郡富来町赤崎	
	南東風	鳳至郡穴水町川島 鳳至郡穴水町甲 鳳至郡穴水町前波 珠洲郡内浦町小木→74 珠洲市高屋町	
	北西風	羽咋郡富来町領家	
ヤスカゼ	東風	珠洲市宝立町→75	
	南東風	羽咋郡富来町領家	
	南東～南風	七尾市石崎町→76	
	南風	鳳至郡穴水町沖波 鳳至郡穴水町前波→77 珠洲郡内浦町小木	
ヤスクダリ	南東風	珠洲市宝立町	
	南東～南風	珠洲郡内浦町松波→78	
	南風	輪島市鳳至町→79	
	南南西風	鳳至郡門前町鹿磯 羽咋郡志賀町高浜→80 鳳至郡穴水町前波	
	南西風	鳳至郡穴水町甲 珠洲郡内浦町小木 珠洲市高屋町	
	西風	羽咋郡富来町赤崎	
ヤスダシ	南西風	鳳至郡穴水町川島→81	
ヤスモノ	南風	珠洲市高屋町	
ヤスモン	南東風	鳳至郡穴水町沖波 珠洲市狼煙町	
ヤマセ	東風	七尾市石崎 珠洲郡内浦町小木	
ワカサ	南東風	羽咋郡富来町赤崎→82 鳳至郡門前町黒島→83 鳳至郡門前町剣地	
	南風	珠洲市三崎→84 輪島市輪島→85	
	南南西風	珠洲市飯田町→86 鳳至郡階段橋→87	
	南西風	鳳至郡穴水町前波 珠洲市狼煙町 珠洲市三崎町寺家→88 珠洲郡内海町小木 珠洲市西海町中田浜→89	
ワカサクダリ	南風	輪島市輪島→90	

このあいの風を「入船に都合の好い風[29]」「心のときめく風[30]」「神様の風[31]」として，「海からくさぐさの好ましいものを，日本人に寄与した風の名をアユと呼んでいた[32]」とし，様々な風の中で，あいの風は，好ましい特別な風として位置づけている．

a) 「入れ風」としてのあいの風

例えば，入り風は，陸風に対する海風であり，「入船に都合の好い風[33]」である．古くは，漂着神や渡来文明を吹き寄せ，沖から貝や海藻をもたらし，近世には，人や物資を運んだ．このような入り風とあいの風は，能登の民謡では，「おや あいのや 入風や[34]」「あいの入れ風[35]」「あいの入り風そよそよと[36]」のようにしばしば決まり文句のように用いられることから，入れ風としての性質を感得していると言える．

b) 「凪ぎ」としてのあいの風

一方，**表-1** の風の性質 1)，8)，13)，14)や七尾市の舟こぎ歌「あいの朝なぎ，下りの夜なぎ，ま風，たばかち，昼に凪ぐ[37]」のように，朝の凪をもたらす風としての性質がある．このほか「夏のアイと人夫は日いっぱい」，「あいの風と夫婦喧嘩は，夜におさまる[38]」などの諺から，一時性の風としての性質があると言える．また，**表-1** の風の性質 9)にあるように，好漁の風として認識する地域もあり，能登において，あいの風は人間の実生活において歓迎された風であったと言える．

４．星の輝き・瞬き・星の出入り・雷鳴

星の和名には，「舵星」「船星」「「魚釣り星」「錨星」など海民が名付けたであろう古い名が残り，地方名も数多くあった．例えば，能登宝立町では，四つ星を「ほかけぼし（帆掛け星）[39]」と呼び，日本海側地方では能登半島から昇る星を「能登ぼし」とか「のとねらみ（能登睨み）」と呼ぶ地域がある[40]．このように地方独自の星の名があるように，星による観望天気も様々である．例えば，石川県や長野県の地方では，「月夜に大風なし[41]」とか「星きらめけば翌日風あり[42]」（宮城県，長野県，富山県地方）のように，月や星のきらめきから風を読む観望天気がある．『水上語彙』による「ホシノテンキウラ」は，星の天気占いを意味し，続く説明文に「北斗を見るに星の光さえず落窪みたる様見ゆれば遠からず雨か風あり．其光冴え渡り浮上りたるやう見ゆれば天気つづく．星の目引とは星の光芒の閃爍動揺することにて，風の兆しなり．[43]」とあり，地平線から沈むことのない北斗七星の輝きの程度や瞬き具合がつぶさに述べられている．

また，風や星の名には，「星の入東風」や「風星」のように星の出入り時に吹く風を示す名がある．「星の入東風」は，「10月頃吹く風の名，昴星の入る頃吹く故名づく[44]」とされ，「風星」は，おおいぬ座のシリウスを呼ぶ輪島市の方言であり「夜明け前にこの星が出ると頃はよく強風になる[45]」とか「これが出るころによく風が吹くところから[46]」と伝えられ，特定の星の出入りにより風を予見する見方が知れる．

更に，星の出入りには，季節，時刻，方角だけでなく，魚の取れる漁期を知らせる重要な役割がある．例えば，能登の小木では，青白く輝くシリウスの和名「青星」を「タラボシ」と呼び，12 月下旬の夕方に上がる時刻を「タラノシノ」と呼ぶ[47]．「シノ」とは能登の方言で漁期を表す．つまり，鱈漁の時期を示す名前である．このほかにも，6 月夜明けに上がる「シバル」（スバル)は夏烏賊が採れ，その小 1 時間後に上がる「ツルガネボシ」（和名：釣鐘星）の時刻を鰐鮫が来る時刻として「ワニノシノ」と言った[48]．能登の珠洲市宝立町でも同様に，「すばるを先頭とするあかぼし（アルデバラーン）・さんこう（三ツ星）・あおぼしの列は，イカ釣りを専門とする漁夫仲間で常に用いる[49]」そうである．初秋の朝に「カラツキ」別名「サンコー」（和名：三つ星，三光）が上がる時刻を「シイラノシノ」と言い，鰯の来る時刻を指した[50]．このように，星には，星の出入りにより固有の魚の漁期を示す呼び名がある．

これは，能登地方だけでなく，例えば，兵庫県高砂では，シリウス（和名：青星）を「烏賊引き星（いかびきぼし）」と言い，この星が昇ってくるとイカ漁の季節になるという[51]．イカ漁は，すばるの出に始まり，この烏賊引き星（シリウス）の出で終わる[52]など実に様々な古い星の名が漁期と一緒に残っている．

さて，星ではないが，日本海沿岸では，11月中旬から12月中旬の雷鳴を「雪下ろし」，「雪颪」，「雪起し」と呼ぶが[53]，能登を含む富山湾沿岸や佐渡では，「ブリオコシ」と呼ぶ．大辞林によれば，12～1月の，寒ブリ漁のころに鳴る雷[54]とある．石川県小松市円山町では，「ニシ」と呼ばれる風について，冬の寒風，1－2日吹き，吹雪，大雪を伴う[55]．一つ雷が鳴るとその夜は豪雪としていることから，「一つ雷」という名でも知られる．

富山県氷見市阿尾では，ブリオコシを初冬ブリ盛漁期の西風を指し，別名大ニシカゼとされる地域もある．つまり，「鰤を連れてくる風[56]」であり，北西の風，冬の雷鳴を言う．このほかにも，石川県鳳至郡穴水町前波では，「マグロカゼ[57]」（**表-１**）と呼ぶ東風もあり，これも，漁期を示す種の風の名である．

石川県のブリオコシに関する観天望気には，**図-4** のように，雷鳴だけでなく，冬のシカタと呼ばれる西風，立山連峰が見えた後の時化などがあり，鰤の海遊の知ら

せを伝播する．

「夜中に雷が鳴り，みぞれが降ると，翌日は鰤の大魚」
「寒中雷鳴あれば，鰤大魚」
「十一月，盛漁期中に雷鳴があると，近々に鰤漁がある」
「十月に南西の風が吹き続けば，鰤が岸によってくる」
「しかた（西風）が吹けば鰤が来る」
「秋から冬にかけて南西の風が吹くと，鰤の海遊が多い」
「越中立山連峰，猛吹雪にて冴えて見ゆるあとに，南東の大時化あり，この後鰤の海遊がある」[58]

図-4　ブリオコシと観天望気の関係性

以上のように，星の輝きや瞬き具体や，特定の星の出入りは，自然の法則を気長に観察した結果として気象の予測に役立てられている．また，海民にとっての星の運行は，季節，時刻，方角だけでなく，気象を占う役割や固有の魚の漁期を知らせる役割があり，人間生活と密接に結びついていると言える．

５．雲の体積・質・高低・姿形・清濁・湿潤

⑴ 蜃気楼

温度の低い海の上へ暖かい空気が流れこんで現れる蜃気楼は，富山や北海道で「蜃気楼が出た後は雨[59]」という言い伝えや「山背の風がたって海が間もなく荒れてこようと思うとき，（蜃気楼が）よく現れる[60]」ということがあることから，蜃気楼も，漁師や船乗りが海原を注意深く観察した結果発見された観天望気の一種と言える．蜃気楼という名称は，中国における想像上の生き物である蜃（みずち，大蛤[おおはまぐり]）が気を吐いて描いた楼閣の意として伝えられ（**図-5**），別名では，海市（かいし），貝櫓，蓬莱島などの呼び名がある．

蜃気楼は，大気の温度差による光の異常屈折現象であるが，気温，天候，風向，風速などの必要条件がある．翌日の天候は崩れるが，当日は晴れ，凪に近い無風状態であるため，天候変化を予測する要素として有効である．

図-5　百鬼夜行拾遺３巻[61]
鳥山石燕 画　長野屋勘吉　文化２[1805]年

⑵ 立山の雲

能登半島からは，地山以外にも名峰白山，立山連峰をはじめとする北アルプスの名山を眺めることができる．一般に，航海においての山の見え方は，海上から特徴のある山の位置や見え方を頼りに船の位置を知る「ヤマアテ」が有名である．石川県では，これを「ヤマダメ」と呼び，能登半島では，石動山，高瓜山，高洲山，山伏山，宝立山，甲の銭塚などがこれに該当する[62]．

ヤマダメに加え，山の存在は，山から吹きおろす風に影響し，珠洲市狼煙では，立山の方角から夕方に一時吹く風を「タテヤマオロシ」（**表-１**）と呼び，同様に，鳳至郡穴水町甲では「富山湾より大波が押し寄せる風で，海難が多い」とされ，能登内浦では一番高波が立つ風を呼んだ．

このほかにも，遠方の山の存在は，その雲居により天候を見極める上で重要であった．「能登半島に雲の土手ができるとアイノカゼ（北東風）が吹き，波が立つ[63]」や，河北郡七塚町外日角では，「宝立山にブタ雲がかかる日は日中大アイが吹く」など，山に掛かる雲の体積、質、高低や姿形により，天候を判断する観天望気がある．

更に、奥能登では，海越しに見る立山は，漁師や船乗りにとって，天候を見極める上での重要な指標であることが立山に関する観天望気から分かる（**図-6**）．

「立山が見えると雨になる」
「立山がはっきり見えると荒れる」
「石崎漁港より立山連峰が明瞭に見えると，二日後南風が強い」
「立山が頂上まで見えると次の日は雨が降る」
「富山湾に立山連峰がくっきり浮かび上がると悪天候になる」
「沖（富山湾）に立山が見えたら次の日は海が荒れる/雨が降る/風が吹く」64)
「立山の雲がホーボク（ゴボサマの法衣）を着ければ，一時間以内に大時化になる」
「立山が冴えれば南西風，曇れば北東風となる」
「寒が過ぎ，立山が冴えて見える時には，鱈が浅上りする」[65]
「越中立山連峰，猛吹雪にて冴えて見ゆるあとに，南東の大時化あり，この後鰤の海遊がある」[66]

図-6　立山と観望天気の関係性

このように能登の人々は，立山の姿の明瞭性により，空気の清濁や湿潤を知り，たなびく雲の体積、質、高低や雲の姿形により，風の強さ，風向を洞察し，時には，魚の海遊を予見する手段として山の姿に注意を払っていたことがわかる．

６．気色と風景についての考察

3章から5章では，漁師・船乗りの見る気色を固有の名とその由来に着目し，明らかにした．以下では，風，星，

雲の気色がどのように風景として感得されたかについて述べる．

(1) あいの風景

あいの風は，海からの恩恵をもたらす「入れ風」や「凪ぎ」のような好ましい風の印象と美しい音の響きが重なり，万葉の時代から，深く愛好された．その情趣を，天平 18(746)年に国司として越中に赴任した大伴家持は，天平 20(748)年に，「之乎路から直越え来れば羽咋の海朝なぎしたり船梶もがも[67]」と能登の朝なぎを詠んでいるが，この歌には，「あゆの風」の要素はない．一方，あゆの風については，「東（あゆ）風 いたくし吹けば水門には 白波高み 妻呼ぶと 洲鳥は騒く[68]」，「英遠の浦に　寄する白波　いや増しに　立ちしき寄せ来東風（あゆ）をいたみかも[69]」，「東風（あゆ）の風いたく吹くらし 奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隠る見ゆ[70]」がある．海辺の風景を情景豊かに描写する歌であるが，海民の捉えた「入れ風」や「凪ぎ」の感覚から遠ざかる．

また，平安初期ごろの成立した歌謡である『催馬楽』に詠まれる歌には，「みちのくち　たけふのこふに　われありと　おやにまうしたべ　こころあひのかぜや　さきむだちや[71]」と流離の心情が詠まれ，「心あひ」と「あいの風」が掛けて詠まれるように，風のたよりとしての意味合いである．

(2) 星・雷鳴の風景

星については，周知のように枕草子の「星は，すばる．」が有名であり，江戸後期の文人，橘南谿（1753-1805)の見聞録『東西遊記』には，「極性（北極星）の高低にて居ながら其国々の気候は知るべし．[72]」と記述されるが，漠然とした捉え方である．能登については，星の名が，固有の名で語られることは稀であり，特筆すべき風景がほとんどない．同様に，万葉集においても，星に関する和歌は数少ない．

一方，「ブリオコシ」については，現代においても北陸地方では一般に使用される方言である．昭和時代の俳人である岸田稚魚（1918-1988）は，第二句集である『負け犬』において，「佐渡の上に日矢旺んなり鰤起し[73]」と詠むように，俳諧の冬の季語として知られる．

(3) 蜃気楼の風景

蜃気楼は，『古事類苑』には，「越中魚津浦ニテハ喜見城ト云フ[74]」と記され，富山県魚津では，喜見城という異称がある．『能登名跡志』には，石川県輪島市鳳至町袖ケ浜について「此袖の濱風景は向の沖に七ツ島とで風により，いろいろに變化し，誠に喜見城をなせり[75]」と記されることから，能登半島でも，蜃気楼は見られ，これを，喜見城と呼ぶことがあったと言える．

喜見城は，仏教用語では，「須弥山の頂上の忉利天にある帝釈天の居城[76]」である．ところで，越中の名山，『今昔物語』には，帝釈天が立山の主神[77]であると記されることから，蜃気楼は，立山とその主神である帝釈天の居城に見立てられたと考えることができる．

寛政 9（1797）年に描かれた「魚津蜃気楼之図附喜見城之図断」は，絵図の一部に 7 枚の紙を重ねることで蜃気楼の移ろう様子を描いた絵図である（**図-7**）．

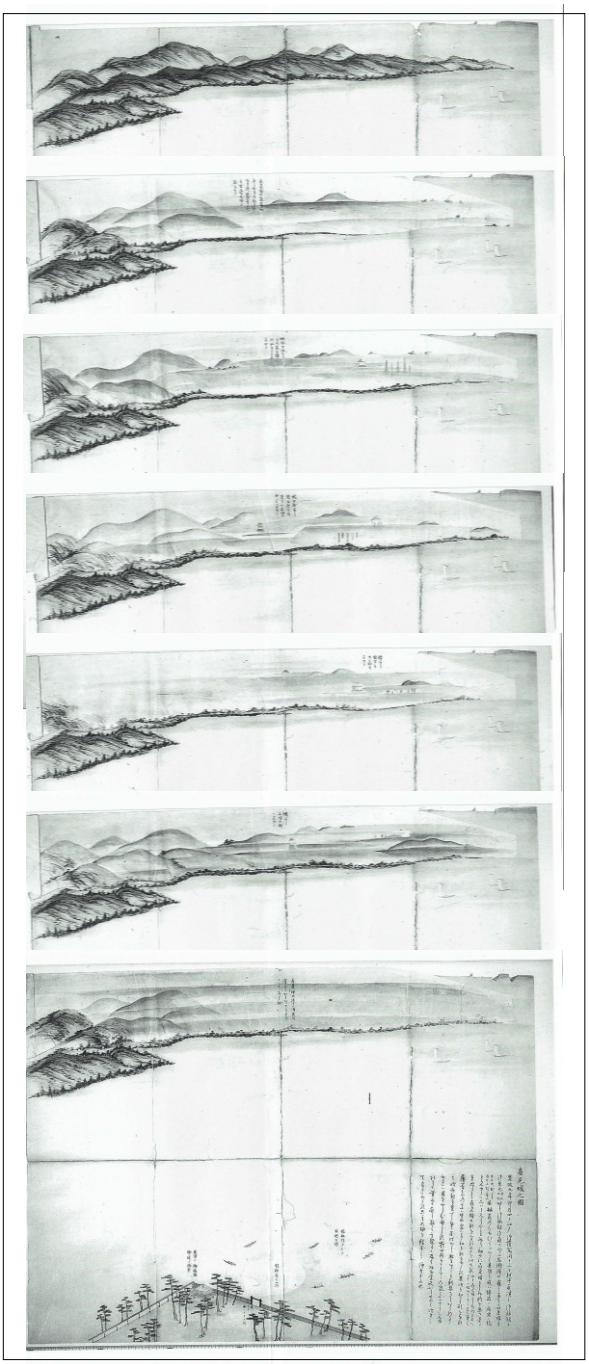

図-7　「魚津蜃気楼之図附喜見城之図断[78]」全 7 枚
（金沢市玉川図書館蔵）

蜃気楼は海のほとりに表れ，越中に地続きするように描かれ，さながら，神のいる所へ，神が海から来て，更に山に移る[79]ように見える．このように考えると，「喜見城」の名は，立山信仰に結び付いた名である可能性がある．

このほか，蜃気楼は，寛政9（1797）年に刊行された『東海道名所図会』には，伊勢湾の四日市にある那古浦で描かれ（**図-8**），文久3（1863）年の14代将軍徳川家茂の上洛を描いた『東海道名所風景』には，同湾に面する桑名の蜃気楼が描かれる（**図-9**）．

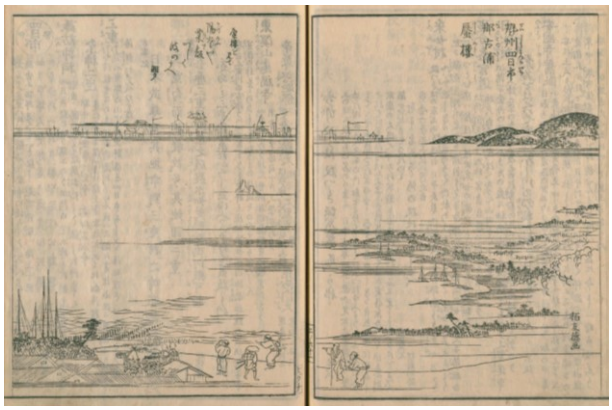

図-8　「勢州四日市那古浦蜃楼[80]」東海道名所図会より

図-9　東海道名所風景：東海道名所之内　桑名蜃氣[81]，国立国会図書館蔵

能登の蜃気楼については，江戸後期の儒者，文人墨客の金子鶴村（1759-1841）の紀行文『能登遊記[82]』において蜃気楼を紹介している．魚津の蜃気楼については，江戸中期の儒者，室鳩巣（1658-1734）の「早発魚津[83]」，前掲『東西遊記』，同じく江戸後期の国学者の菅江真澄（1754-1829）『真澄遊覧記[84]』などの紀行文に表れ，その奇観が語られる．さらには，志賀重昂（1863-1927）の代表作である，明治27（1894）年に風光を論じた『日本風景論[85]』には，「迷景」として取り上げられているが，前述の『東西遊記』と『東海道名所図会』の引用に留まっている．

(4) 立山の風景

立山については，国守として越中に赴任した万葉歌人である大伴家持の有名な歌「立山（たちやま）に　降り置ける雪を　常夏に　見れども飽かず　神からならし[86]」がある．「見れども飽かず」の精神は，「見入ってゐる」「食い入るほど見てゐる」と説明される[87]が，漁師，船乗りの気長に見る気色とは，志向が異なると言える．

家持の長歌や，家持が詠んだ立山の賦に追和する大伴池主による「敬和立山賦一首」（**図-10**）は，白雲に聳える立山の姿，朝の立ちこめる霧，夕のたなびく雲を深く愛好し，その姿を万代に絶えず残そうとする繊細な頌歌である．

「朝日さし そがひに見ゆる 神ながら 御名に帯ばせる 白雲の 千重を押し別け 天そそり 高き立山 冬夏と 別くこともなく 白栲に 雪は降り置きて 古ゆあり来にければ こごしかも 岩の神さびたまきはる 幾代経にけむ 立ちて居て 見れども異し 峰高み 谷を深みと 落ちたぎつ 清き河内に 朝さらず 霧立ちわたり 夕されば 雲居たなびき 雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思ひ過ぐさず 行く水の 音もさやけく 万代に 言ひ継ぎゆかむ 川し絶えずは」

図-10　大伴池主「立山の賦に敬みて和へたる一首[88]」

煙霞の痼疾のごとく歌にあらわれるその精神は，千年以降も語り継がれ，近代以降の名山記や紀行文に名を残す．例えば，橘南渓著『名山論』では，「山の姿峨々として，嶮岨画のごとくなるは，越中立山の剱峯に勝れるものなし．」として賞賛され，江戸時代後期の文人画家である谷文晁（1763-1841）の『日本名山圖會[89]』には，絶嶮の姿が描かれ（**図-11**），前掲『能登遊記』では，海越しの立山と雲居が描かれる（**図-12**，**図-13**）．『日本風景論』においては，池主の和歌および『名山論』を引用し，洗練された風景美が語られる．

(5) 気色と風景の相違

以上のように，どれも風景美を賛歌する優れた詩歌や絵画である．前章までに明らかとなった海民の気色とその後に同名で語られる風景について考察すると，同様の現象を捉えつつも，両者には大きな感覚の質の違いがあると言える．気色は，自然の法則を強く自覚した実相であり，人間生活に密接するのに対し，風景は，実用的目

的から解放された実相であり，美的感覚に基づいた自然の賞賛あるいは美しいと感じる心と言える．

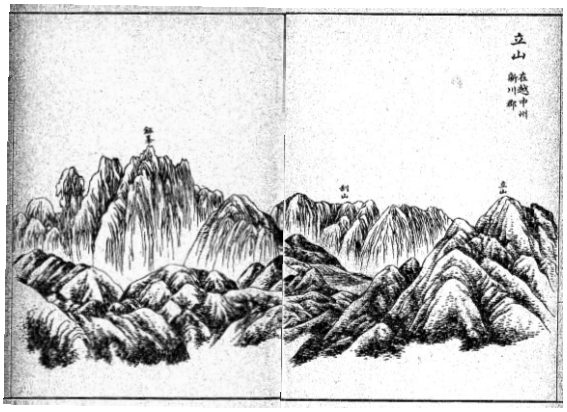

図-11　「立山」谷文晁画『日本名山圖會』より

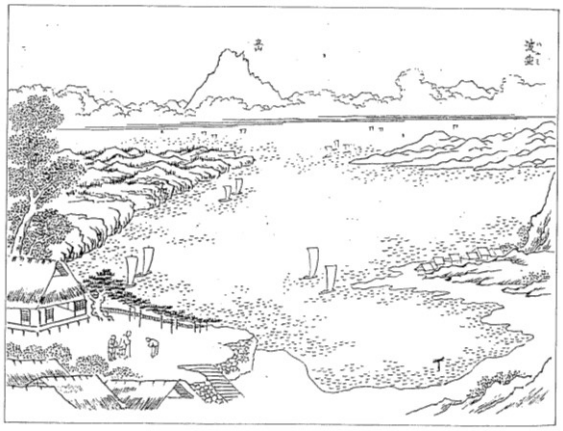

図-12　波並からの立山[90]『能登遊記』より

図-13　小木之真脇山路眺望之図[91]『能登遊記』より

7．まとめ

本研究では，珠洲市蛸島町に伝わる神事芸能「早船狂言」から，船乗りの日和見に関する主要な判断要素を抽出し，続く章において，風，星，雲に着目し，それぞれの固有の名前に着目し，名前の由来と気象の性質を明らかにした．

最後に，3 章から 5 章までで述べた気色と同名の名で語られる風景に着目し，両者を比較すると，両者は全く異なる姿勢であると言える．漁師・船乗りの見る海の気色は，身体に沁みついた気色であり，知的観賞や感情的陶酔を許さぬ[92]類の気色であり，風雅風流などとは相対する姿勢であった．長い年月をかけて渾身の力で自然を感受し，幾度の観察を重ね，個人や集団の積み上げた成果である．そして，視覚のみならず，聴覚，皮膚感覚，嗅覚，冷覚，温覚などのあらゆる感覚器官と知覚体験とをもって，精度を極めた結果の気色である．

一方で，現代はもちろん，風景を詠ずる文化人と言えども，漁師や船乗りのような感性で風景を発見することはできない．翻って，漁師や船乗りが至極曖昧に海の気色を鑑賞することもできないように両者には大きな隔たりがある．しかしながら，風景の成り立ちを探ると，漁師や船乗りの捉えた気色は，後世に受け継がれた風景の源泉であると言える．従って，気象を源泉とする気色は，風景の源泉と言え，風景学の出発の原点のひとつとして位置づけてもよいだろう．

参考文献

1)　和辻哲朗：風土 – 人間学的考察，p. 9，岩波書店，1979.
2)　柳田国男：海上の道，p. 16，角川学芸出版，2013.
3)　幸田露伴：水上語彙，智徳会，1897.
4)　金谷治訳注：論語，p. 62，岩波書店，1963.
5)　山田吉彦：天気で読む日本地図 – 各地に伝わる風・雲・雨の言い伝え，p. 124，PHP研究所，2003.
6)　松村明編：大辞林，p. 2069，三省堂，1988.
7)　南波松太郎：日和山 – ものと人間の文化史，法政大学出版局，1988.
8)　村山伝兵衛［ほか］編：松前産物大概鑑・関東鰯網来由記・能登国採魚図絵・安下浦年中行事・小川嶋鯨鯢合戦，p. 218-219，農書全集（第58巻）漁業，農山漁村文化協会，1995.
9)　柳田国男：海上の道，p. 16，角川学芸出版，2013.
10)　西山郷史：蛸島早船狂言と羽歌，能登の文化財，Vol. 30，pp. 7-12，能登文化財保護連絡協議会，1996
11)　小学館国語辞典編集部：日本方言大辞典．小学館，1989.″けしき【気色】，JapanKnowledge，（参照 2019-09-01）
12)　小学館国語辞典編集部：日本方言大辞典．小学館，1989.″けしき【気色】，JapanKnowledge，（参照 2019-09-01）
13)　日置謙 校訂・解説：能登路の旅（復刻版），p. 58，石川県図書館協会，1970.
14)　日本常民文化研究所．日本常民生活資料叢書，日本常民文化研究所編，第21巻 中国・四国篇2，pp. 300-301，三一書房，1973.
15)　野尻抱影：星の民俗学，p. 170，講談社，1978.
16)　鹿島郡自治會：石川縣鹿島郡誌，p. 845，鹿島郡自治會，1928.
17)　前掲書『石川縣鹿島郡誌』，p. 845.
18)　櫻田勝徳：土佐四萬十川の漁業と川舟 - 土佐漁村民俗雑記，アチックミューゼアムノート 第9，土豫漁村採訪旅行報告，pp. 40-41，1936.
19)　岡田憲治，原田稔，宇田川眞人，倉嶋厚：風と雲のことば

辞典，p.155，講談社，2016.
20) 書写者不明：野島流船軍古法 5，書写年不明，東京大学駒場図書館大日本海志編纂資料ホームページより http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/kaishi/pages/1-4-27.html (参照 2019-09-01)
21) 前掲書『風と雲のことば辞典』，p.145.
22) 石垣島地方気象台ホームページより(https://www.jma-net.go.jp/ishigaki/know/tenbunya/paikaji/paikaji1.html#p107)（参照 2019-09-01）
23) 石垣島地方気象台ホームページより(https://www.jma-net.go.jp/ishigaki/know/tenbunya/paikaji/paikaji1.html#p107)（参照 2019-09-01）
24) 書写者不明：船武者積並天文，書写年不明，東京大学駒場図書館大日本海志編纂資料ホームページより (http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/kaishi/category/cate_2_1.html)（参照 2019-09-01）
25) 関口武：風の事典，原書房，1985.
26) 松村明監修：デジタル大辞泉，小学館.(https://kotobank.jp/word/あいの風-421710)（参照 2019-09-01）
27) 北陸放送：石川県の民謡，北陸放送，1967.(鹿島郡中島町 釣打地方　盆踊唄)
28) 前掲書『風の事典』
29) 前掲書『海上の道』，p.19.
30) 前掲書『海上の道』，p.19.
31) 数馬公：能州能登町物語 Ⅰ，p.217，北國新聞社出版局，2005.
32) 前掲書『海上の道』，p.23.
33) 前掲書『海上の道』，p.19.
34) 前掲書『石川県の民謡』，(珠洲市狼煙町地方　田打唄)
35) 前掲書『石川県の民謡』，(珠洲市馬緤町地方　馬緤追分)
36) 前掲書『能州能登町物語Ⅰ』，p.216.
37) 前掲書『石川県の民謡』，p.197.(七尾市石崎町地方　舟こぎ唄)
38) 前掲書『能州能登町物語Ⅰ』，p.220.
39) 野尻抱影：日本星名辞典，p.24，東京堂出版，1973.
40) 前掲書『日本星名辞典』，p.28.
41) 前掲書『風と雲のことば辞典』，p.354.
42) 前掲書『風と雲のことば辞典』，p.356.
43) 前掲書『水上語彙』，p.82.
44) 前掲書『水上語彙』，p.82.
45) 小学館国語辞典編集部：日本方言大辞典．小学館，1989. ″かぜぼし【風星】［方言］″，日本方言大辞典，JapanKnowledge，(参照 2019-08-18)
46) 小学館国語辞典編集部：日本方言大辞典．小学館，1989. ″かぜぼし【風星】［方言］″，日本方言大辞典，JapanKnowledge，(参照 2019-08-18)
47) 馬場宏：能登の方言，p.224，馬場宏，1986.
48) 前掲書『能登の方言』，p.224.
49) 前掲書『日本星名辞典』，p.156.
50) 前掲書『能登の方言』，p.224.
51) 野尻抱影：日本の星 - 星の方言集(改版)，p.273，中央公論新社，2018.
52) 前掲書『日本の星』，p.273.
53) 真木太一 他 編：風の事典，p.189，丸善出版，2011.
54) 松村明監修：デジタル大辞泉，小学館.(https://kotobank.jp/word/鰤起し-621320)（参照 2019-09-01）
55) 前掲書『風の事典』，p.645.
56) 前掲書『天気で読む日本地図』p.121．および，前掲書『風の事典』，p.780.
57) 前掲書『風の事典』，p.800.
58) 前掲書『能州能登町物語 Ⅰ』，p.218.
59) 前掲書『天気で読む日本地図』，p.208.
60) 菅江真澄，内田武志，宮本常一編訳：菅江真澄遊覧記 5，p.60，平凡社，1965.
61) 鳥山石燕 画：百鬼夜行拾遺 3巻，長野屋勘吉，1805．国立国会図書館デジタルコレクションより(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2551539?tocOpened=1)（参照 2019-09-01）
62) 北国新聞社：石川県大百科事典［改訂版］，p.993，北國新聞社，1993.
63) 前掲書『天気で読む日本地図』，p.191.
64) 前掲書『天気で読む日本地図』，p.205.
65) 前掲書『能州能登町物語 Ⅰ』，pp.220-221.
66) 前掲書『能州能登町物語 Ⅰ』，p.218.
67) 中西進：万葉集 4，p.137（4025番），講談社，1978.
68) 日本国語大辞典 第二版，小学館，2000-2002. ″あゆの風（かぜ）″，日本国語大辞典，JapanKnowledge，(参照 2019-09-04)
69) 前掲書『万葉集』，p.169 （4093番）.
70) 前掲書『万葉集』，p.134（4017番）.
71) 木村紀子訳注：催馬楽，pp.86-88，平凡社，2006.
72) 橘南谿，五十緒宗政校注：東西遊記1，p.194,平凡社，1974.
73) 岸田稚魚：負け犬（岸田稚魚句集），pp.183-202，近藤書店，1957
74) 神宮司庁古事類苑出版事務所編：古事類苑動物部6，p.1016，神宮司庁，1896-1914.
75) 蘆田伊人編：諸国叢書（北陸 1）（能登名跡志），p.279，大日本地誌大系刊行会，1917
76) 前掲書『大辞泉』，p.580.
77) 池上洵一編：今昔物語集　本朝部（上），p.223，岩波書店，2001.
78) 魚津蜃気楼之図附喜見城之図断，金沢市玉川図書南近世資料館蔵，1797
79) 折口信夫，安藤礼二編：折口信夫芸能論集，p.15，講談社，2012.
80) 秋里籬島,粕谷宏紀監修：新訂東海道名所図会，Vol. 1.，pp.328-332新訂日本名所図会集，ぺりかん社，2001.
81) 周麿：東海道名所之内（桑名蜃気楼），丸鉄，1864．国立国会図書館デジタルコレクションより(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1309529)（参照 2019-09-04）
82) 金子鶴村，鶴来町立博物館編： 能登遊記，第13編，つるぎ叢書,鶴来町教育委員会，1993.
83) 室鳩巣著，杉下元明編集・解説：鳩巣先生文集，p.50，世儒家文集集成，第13巻，ぺりかん社，1991.
84) 菅江真澄，内田武志&宮本常一編訳：菅江真澄遊覧記 4，p.71，平凡社，1965.
85) 志賀重昂，近藤信行校訂：日本風景論，岩波書店，1995.
86) 前掲書『万葉集』，p.122（4001番）.
87) 唐木順三：日本人の心の歴史．P.47，筑摩書房，1993.
88) 前掲書『万葉集』，p.123（4003番）.
89) 谷文晁 画[他]：日本名山図会．人，東陽堂，1903．国立国会図書館デジタルコレクションより(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/762829)（参照 2019-09-04）
90) 前掲書『能登遊記』，p.33.
91) 前掲書『能登遊記』，p.46.
92) 前掲書『風土』，p.74.